

玉文化 第5号（抜刷）
2008.5 日本玉文化研究会

種子島「現和巣」で採集された翡翠大珠

沖田 純一郎

種子島「現和巣」で採集された翡翠大珠

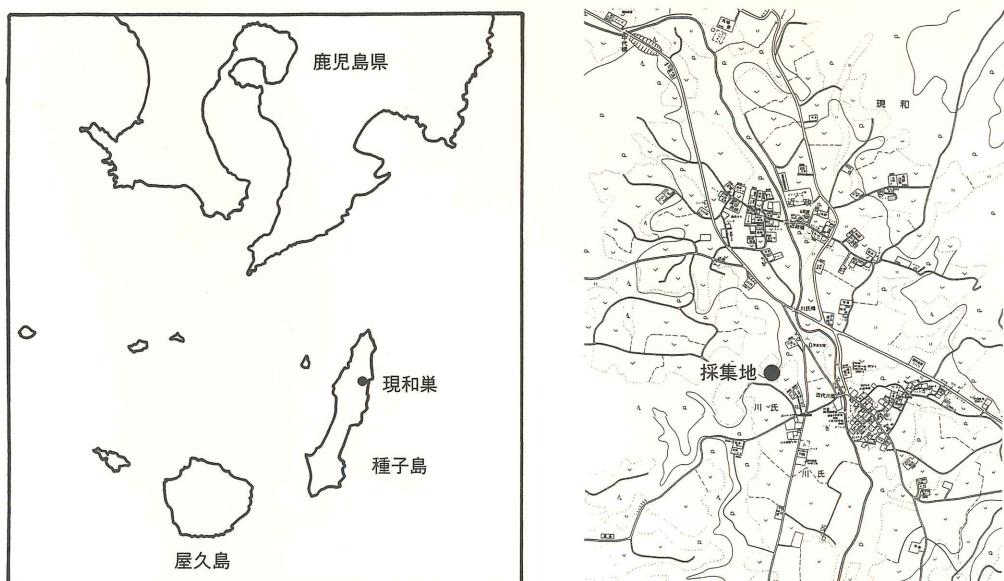
沖田 純一郎

1 種子島の位置及び採集地の環境

翡翠大珠が採集された地は、西之表市現和川氏字「現和巣」である。西之表市は種子島に位置し、種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約40kmの海上にあり南北52km・東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島で、西方に位置する屋久島とは対照的である。地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、東海岸側は断崖に富み、西海岸側には砂丘が発達している。行政区では北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

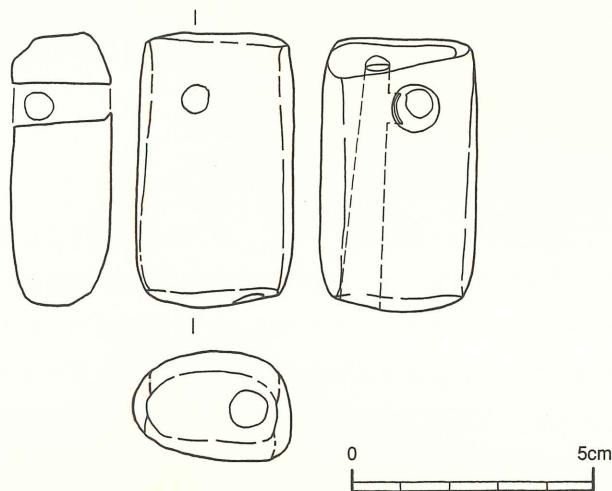
種子島には旧石器時代から歴史時代の遺跡が多数確認されており、なかでも旧石器時代の遺跡・縄文時代草創期の遺跡・弥生後期から古墳時代にかけての埋葬遺跡などが全国的に注目を浴びている。

今回紹介する、翡翠大珠が採集された地は西之表市現和川氏「現和巣」であり、西之表市の東側に位置する。採集された地は個人のタバコ畑であり、採集したのは畑の耕作者であった。周辺では縄文時代早期・後期・弥生時代の遺跡が確認されている。



第1図 翡翠採集地位置図（種子島西之表市）

2 採集された経緯及び当時の所見



第2図 現和巣採集翡翠大珠実測図

1985年5月西之表市教育委員会種子島開発総合センターに翡翠が持ち込まれた。採集地は前述したとおり、現和巣のタバコ畑である。採集者から聞き取り調査を行ったところ、翡翠が採取された畑地からは、石斧や土器片なども出土しているとのことであった。

採集された当時は翡翠の形状から岩笛の可能性が高いということで、専門家に鑑定を依頼している。東京都国分寺市恋ヶ窪遺跡から出土した縄文中期の資料に酷似して

いるとされているが、岩笛であると断定はしていない。時期については採集地から縄文後期の土器片が出土していたことから、縄文後期の可能性が高いとされていた。この翡翠は資料の価値が極めて高いため、種子島開発総合センターに寄託され、展示・保管することになった。

3 翡翠の形状（口絵1・上）

最大長5.9cm、最大幅3.2cm、最大厚2.4cm、重量87gで角のとれた直方体の形を呈しており、大型のものである。穿孔が4箇所施されており、直径は0.5cmから1cm程で、この4箇所の穿孔は全て貫通しており、断面の形状はこの穿孔面が交差し墓標状を呈しているのが大きな特徴である。色調は面ごとに微妙に異なっており、明るい緑、薄い緑、灰白色、灰緑褐色である。鹿児島大学埋蔵文化財調査室に石材鑑定を依頼した結果、糸魚川・青海地域産ヒスイであり、チタンの含有量が多く、青色のヒスイには見られるが、緑色のヒスイにチタンが入るのは極めて珍しいとの報告を受けた。

4 現在の資料の位置づけ

採集当時は岩笛の可能性もあるとされていたが、現時点では大珠として捉えている。時期については採集地で縄文時代後期の土器片が出土していたことから、縄文後期とされているが、現在採集地で土器片は発見されず、また当時採集された土器片自体も所在が不明であり、

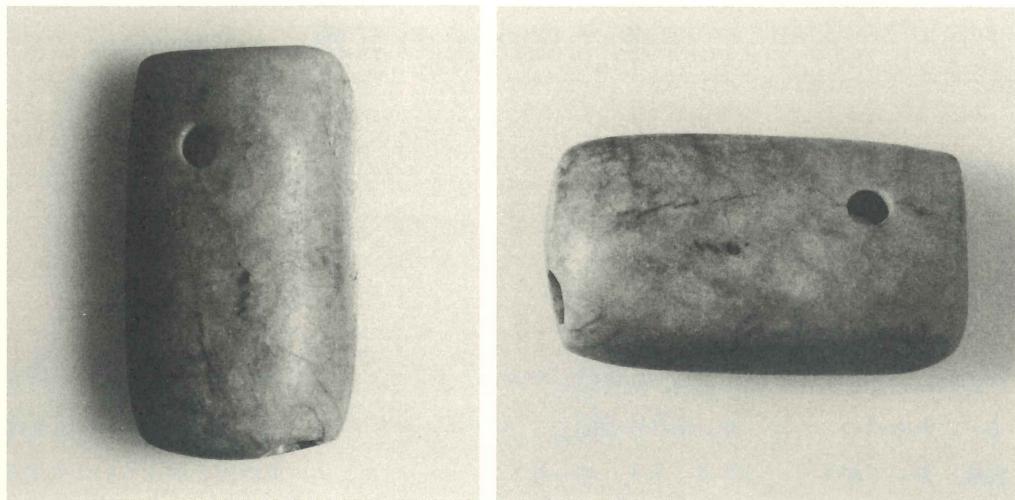


写真 現和菴採集翡翠大珠

確かなことを述べることはできない。今後採集地の発掘調査を行い、確認していく必要がある。

これまで、種子島で確認されているヒスイ製品はこの1点のみであるため、その資料価値は極めて高く、また九州地域でもヒスイが出土するのは一部地域に限定されている傾向があるが、この大珠は南西諸島の種子島にヒスイが流通したということを表しており、交易のネットワークを考えるうえでも非常に興味深い資料である。